

「光の子、昼の子として」

I テサロニケ 4:9-12

2021.10.3 南与力町教会

序：あいさつ

先週は休暇をいただきまして、ゆっくり過ごすことが許され感謝でした。また日曜日、当教会の礼拝では丸岡洋希長老が御言葉の奉仕をしてくださったことにも主にあって感謝しています。私も後からライブ配信を通してそれを聞き、御言葉の恵みにあずかることができました。

さて、私が担当させていただいている朝の礼拝では、パウロが記しましたテサロニケの信徒への手紙第一から御言葉に耳を傾けています。今日から最後の章、第5章に入ります。

1. 「主の日」は盗人そして陣痛のように (5:1-3)

5章1節は次のような言葉で始まっています。

「兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません。」

「その時と時期」というのは、今日の個所の前のところで語られていた「主が来られる日」(4:15)、すなわち主イエス・キリストが再臨される時と時期、ということです。歴史の中では、イエス・キリストがいつ来られるのか、ということに関心がもたれ、その日付を特定しようとする試みが幾度もなされてきました。西暦何年の何月何日にキリストが来られる、そして世が終わる。そのような予言がなされてきたのです。しかしそのような予言はことごとく外れてきました。それはある意味当然です。主が再び来られるのがいつか、というようなことは、私たちに知らされていないからです。主イエスご自身、マルコによる福音書13章32節で、「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである」とおっしゃっています。天使も、御子イエスも知らないようなことを、私たちが知ることはできません。それは父なる神のみがご存じのことなのです。

パウロもここで主の再臨の時や時期については、「あなたがたには書き記す必要はありません」と言っています。この翻訳だとパウロはそれを知っているけれども、書き記す必要はない、と読めないこともありません。しかし、もちろんそうではありません。この言葉は原文では「あなたがた」が主語です。パウロが書く必要がないというよりも、「あなたがたが」書いてもらう必要がない、知る必要がない。そこに焦点があります。

なぜ書いてもらう必要がないのでしょうか。2節では次のように言われています。

「盗人が夜やって来るように、主の日は来るということを、あなたがた自身よく知っているからです。」

「主の日」は「盗人が夜やって来るように」、やって来る。あなた方はそのことをよく知っている。そうパウロは言っています。ここで「よく知っている」と訳されている、「よく」という言葉は「正確に」という意味を持っています。あなた方は、「盗人が夜やって来るように、主の日は来るということ」を正確に知っている。それで十分だ、とパウロは言っているのです。再臨の時と時期について正確に知ることはできません。知る必要もないのです。むしろ私たちが正確に知っておくべきことは、「主の日」が盗人のように夜やって来る、ということです。盗人、泥棒が「何月何日にあなたの家に入りますよ」と言うことはまずありません。泥棒は予想もしてないときに、突然やって来るのです。それと同じように、「主の日」も予想もしなかった時、突然訪れます。続く5章3節には次のようにあります。

「人々が「無事だ。安全だ」と言っているそのやさきに、突然、破滅が襲うのです。ちょうど妊婦に産みの苦しみがやって来るのと同じで、決してそれから逃れられません。」

ここで「無事だ」と訳されている言葉は通常「平和」と訳される言葉です。人々が「平和だ、安全だ」と言っている。そのやさきに、突如として破滅が人々を襲うのです。「平和だ、安全だ」という言葉の背景には、旧約聖書のエレミヤ書6章14節などに記されている偽預言者の言葉があると考えられます。エレミヤ書6章13節14節をお読みいたします。

「身分の低い者から高い者に至るまで／皆、利をむさぼり／預言者から祭司に至るまで皆、欺く。彼らは、わが民の破滅を手軽に治療して／平和がないのに、『平和、平和』と言う。」

日本ではコロナウイルスの脅威の中、東京オリンピックが行われましたが、首相をはじめとする政治家たちは「安心、安全の大会」という言葉を繰り返しました。また安部首相以来、日本は「積極的平和主義」を掲げ、外国からの脅威に対し、武力を持ち、強化することで「平和」を実現する、と謳っています。武力を強化できた時には、これで「平和だ、安全だ」と人々は言うのでしょうか。また現在、コロナの感染は落ち着いてきていますが、やがてコロナウイルスの脅威がほとんどなくなれば人々は「平和だ、安全だ」と言うのかもしれませんが。平和や安全自体は私たちも望み、祈っていることです。しかし私たちはそのような平和や安全が永続的に続くと考えるべきではありません。たとえ一時的に平和や安全が実現されたかに見えたとしても、そのやさきに突然「主の日」は到来し、破滅が襲いかかるからです。

さらに、それは「妊婦に産みの苦しみがやって来るのと同じで、決してそれから逃れられない」と言われています。「産みの痛み」すなわち陣痛がいつ来るのか、ということも正確にはわかりません。一応、出産予定日と言われるものがありますが、みんなちょうどその日に陣痛が来るわけではないのです。そして子どもを産むにあたっては、陣痛、産みの痛みを避けることはできません。それと同じように、「主の日」が到来する際の大きな痛みや苦しみも決して避けることはできない、逃れることはできないのです。

これは恐ろしいことではないかと思えます。私たちはコロナウイルスが破壊的なダメージを人々に与え、痛みと苦しみを与えてきたことを見えています。しかしそれ以上の決定的な「破滅」が、大きな苦しみが人々を襲うのです。それが「主の日」に起こる、と言われていています。それは旧約聖書の預言者たちが語ってきたことでした。「主の日」とは、「裁きの日」であり、「神の怒りと憤り」が注がれる日なのです。

2. 光の子、昼の子として (5:4-8)

・あなた方は光の子、昼の子

では私たちは「主の日」をただ恐れおののきつつ待つしかないのでしょうか。そうではありません。パウロは5章4節から次のように語っていきます。

「しかし、兄弟たち、あなたがたは暗闇の中にはありません。ですから、主の日が、盗人のように突然あなたがたを襲うことはないのです。」

さきほどまで、主の日は盗人のようにやって来る、と言われていたのですが、ここでは「主の日は、盗人のように突然あなたがたを襲うことはない」と約束されています。なぜかと言えば、「あなたがた」、すなわち主にある兄弟姉妹は、「暗闇の中にいるのではない」からです。「暗闇」とは聖書において、光の源である神様から遠く離れた領域、神に背いて生きる人々が属している領域です。そういう暗闇の中にいる人々には、「盗人が夜やって来るように」、主の日がその人々を襲うのです。しかし、あなたがたはそうではない。あなたがたは暗闇の中にいるのではないのだから、もはや主の日はあなたがたを盗人のように襲うことはない。そして続く5節

「あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません。」

「～の子」とは「その性質を持った者」という意味があります。「光の子、昼の子」とは光の性質、昼の性質を持った者、ということになります。キリスト者が「光の子」であるとは新約聖書の他の箇所でも言われていることです。例えば、エフェソ5章8節

「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。」

私たちも以前は暗闇の中のあったのですが、光である主イエスを信じ、主に結ばれることによって、今や「光の子」とされているのです。

一方、「昼の子」という表現が出て来るのはこの箇所だけです。当然「光の子」との関連で「昼の子」と言われています。またここで覚えたいことは、ここで「昼」と訳されている言葉は、「主の日の「日」という言葉と同じギリシア語だということです。ですから、「昼の子」とは、「主の日に属する子」という意味合いも含んでいるのです。「主の日はまだ来ていないのですが、私たちキリストを信じる者は、すでにその日に属する者、「昼の子」とされています。もはや、夜にも暗闇にも属していないのです。

・目を覚まし、しらふでいよう

ですから、私たちは「光の子、昼の子」らしく振る舞う必要があります。そのことが6節から8節にかけて教えられています。

「従って、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいましょう。眠る者は夜眠り、酒に酔う者は夜酔います。しかし、わたしたちは昼に属していますから、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいましょう。」

勧められていることは、夜に属している人々のように眠りこげず、目を覚ましていよう、ということです。さらに「身を慎んでいましょう」ということが、6節でも8節でも勧められています。「身を慎む」と訳されている言葉は元々、「しらふでいる、正気である」という意味があります。7節で「酒に酔う者は夜酔います」と言われていますが、それとは反対の状態です。酒に酔わず、しらふの状態である。酒に酔って意識が朦朧とした状態ではなく、はっきりした意識である、ということです。ここで「目を覚ましていよう、身を慎んでいよう、しらふでいよう」と言われているのは、比喩的な意味においてです。霊的に眠りこげ、酒に酔っている状態とはどういうもののでしょうか。それは5章3節で人々が「無事だ、安全だ」と言っている姿が描かれていましたが、そのようなものでしょう。主の日が来

る、破滅が突然やって来るなどとは思ってもせず、「平和だ、安全だ」と呑気に言っている。それが靈的には眠り、酒に酔っている状態なのです。しかし、昼の子である私たちは、そのような人々と同じように眠ったり、酔ったりするのではなく、靈的に目を覚まし、しらふの状態、来るべき「主の日」を待たせよう。目を覚まして主イエスの帰りを待ち続けよう。そのように呼びかけられているのです。

さらに8節では「わたしたちは昼に属していますから、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいきましょう」と言われています。ただ「身を慎み、しらふでいる」だけではなく、「信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶって」そのようにしていよう、と勧められています。ここには「信仰、愛、希望」という三点セットが出て来ています。それはすでに1章3節で「あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです」と言われていた時に出てきていたものでした。第一コリント13章13節でも、順番は異なりますが、「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る」という形で出てきています。

信仰と愛と希望。この三つが私たち信仰者、キリスト者の在り方として最も基本的で大切なものです。そしてパウロはそれをこの個所では兵士が身に着ける「武具」に例えています。おそらく見張りの務めを任されている兵士の姿がここでイメージされています。「武具」が必要なのは、敵の攻撃から身を守るためです。私たち信仰者を攻撃してくる敵は、サタンです。サタンは私たちを試み、誘惑し、滅ぼそうと企んでいるのです。そのようなサタンの攻撃を防いで身を守るために私たちは武具を身に着けている必要があるのです。ではその武具とはどのようなものなのでしょうか。

まず「信仰と愛を胸当てとして着け」と言われています。ここだけでなく「信仰と愛」はしばしばセットで出てきます。神様への信仰、イエス・キリストへの信仰、それは愛を伴う。信仰は、神と隣人への愛となって外に現れるのです。それゆえ信仰と愛はセットです。そのような信仰と愛を胸当てとして着けていよう。

さらに「救いの希望を兜としてかぶろう」と言われます。頭を守る「兜」はとても大切です。その兜とは「救いの希望」です。「希望」と言われていますから、それは救いが将来完成することへの希望ということです。主イエスが再び来られるとき、私たちは完全に救われる。その「救いの希望」を兜としてかぶり、敵であるサタンの攻撃を防ぐのです。

このように私たちは、信仰と愛を胸当てとして身に着け、救いの希望を兜としてかぶり、しらふの状態、主の帰りを待ち続ける、そのような見張りの兵士の務めを全うするよう招かれ、勧められているのです。

3. 神の定めとイエスの死による救いの確かさ (5:9-10)

そしてパウロは続く5章9節、10節で、「救いの希望」についてのさらなる説明と根拠づけを行います。5章9節

「神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです。」

「怒り」とは「主の日」に罪人たちに注がれる神の怒りのことです。私たちもこれまで多くの罪を犯し、今も罪を犯してしまう罪人です。ですから本来、私たちもその怒りと憤りを受けるべき者なので

す。しかし神は、わたしたちを怒りへの定められたのではない、と言われます。そうではなく「わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです」。ここに私たちの「救いの希望」の確かさがあります。私たちの救いの希望は単なる私たちの願望ではありません。神が、私たちを怒りに定めることなく、むしろ私たちが救いを獲得し、所有するよう定めてくださった、神が決めてくださったのです。この神の定めと決定に私たちの救いの揺るがない根拠があります。そして、この救いは私たちが自分の力や功績で獲得するものではありません。そうではなく、「わたしたちの主イエス・キリストによって（通して）」獲得される救いです。

では主イエス・キリストは私たちの救いのために何をしてくださったのでしょうか。10節には次のようにあります。

「主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです。」

私たちの主イエス・キリストは、「わたしたちのために死んでくださった」お方です。「わたしたちのために死なれた」とは、「わたしたちの罪のために死んでくださった」（Iコリント 15:3）ということでもあります。主イエスは私たちの罪を背負い、私たちが本来受けなければならない罪に対する神の怒りと裁きを受けるために、十字架上で死んでくださったのです。ですから私たちは、「主の日」に「神の怒りと裁き」を受けずに済むのです。

そして主イエスが死んでくださった目的は、「わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです」と言われています。

ここで「目覚めていても眠っていても」と言われているのは、5章6節で「従って、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいましょう」と言われていることとは違う意味においてです。ここで「目覚めていても眠っていても」とも「生きていても、死んでいても」という意味です。すなわち主が再び来られるときに生き残っていても、すでに死んでしまっても、どちらにしても私たちが「主と共に生きるようになる」。そのために主は死んでくださったのです。それゆえ主イエス・キリストの十字架の死にこそ、私たちの救いの確かさはあるのです。私たちはなお弱く罪を犯してしまいます。しかし主がそのような私たちのために死んでくださった。それゆえ私たちは主と共に生きることができ。たとえ主が再び来られる前に死んでしまったとしても、眠りについたとしても、「主と共に生き続ける」という事実、その救いは変わりません。ですから私たちは、「救いの希望」を確かなものとして、兜としてかぶり、高く掲げることができるのです。

結論

そして最後の11節は

「ですから、あなたがたは、現にそうしているように、励まし合い、お互いの向上に心がけなさい。」

テサロニケ教会の人々がそうであったように、私たちもこの世では苦難があり試練があります。しかし揺るがない救いの希望が与えられているのですから、お互いに励まし合うよう、勧められています。そして「お互いの向上に心がけなさい」。これはお互いを「建て上げなさい」という言葉です。建物を

建てる時に使われる言葉です。私たちは建設中の建物のような存在です。まだ未完成です。だからこそ、お互いを建て上げていくように、信仰者として、信仰と愛と希望を身に着けた者として成長していくよう互いに励まし合いなさい、と言われていました。教会とはそのようなところでは。

私たちはそのように励まし合いながら、「光の子、昼の子」として、目を覚まし、身を慎み、信仰と愛と救いの希望を身に着けて、「主の日」を待ち望み続けてまいりましょう。